隣俗家書入淡

中

三田図書館蔵

續俳家奇人傳卷中

故句當　竹内玄玄一遺編

三碧所藏

宮司能順

能順八郎加賀の文明之連歌小長じて世ふ猶歩行貞享乃帝元旦年号〻連が分れ難をしむ涉歳のあかり至わふ活歌とたまりる之時たゝくまりる句「けさ初るゆ筆れ海まを素の水後よ加賀大守の招きに意しゝく小松林院よりの使免を以し元慈門初御しゝく居紙対ふ雅淡数刹ふ之ふ〻ゆるし連俳のたゞひめハかゝをやとまりる乃不「秋風ハ芒打ちる夕べ哉」の二句を書〻出ハ行迄バはとにとれ俳名をけゞめを分〻れ二箇も其物冥に伏行迄けること元禄七年の冬翁の須白〻

命と頼んで寿を願いそく老死時く世の羅客紙尺るる
年六十七十か及びくハ白も深くハ素げる支成ごく古人さく
稚老れ他老ハ多く風流の劣りこ深やうにぞおゆる式遊く
あ我ふ若ハ年六十と限りこ有ん所べし我も羨く侍ると実
か尺る堪能の人も凡丈の間拙生べきにあく侍と遊時加たるこ
あくりこあむ

木因坊

木因ハ英清の國大垣れ人吟哭を深くして風顔あり「早苗
みく命のながきこゝちせり」「れなるで史紙切るふ尺るハ義なり
妻ふ後れる人く「なき新ハうつ〜ご紙続うか時ア蕉翁
ある人の舎遊ふく「蒜れ浦ごきに寄るとおがあてしいるふり
「寄れれる花の後尾とようけるこ附くり遊時英清乃

木因坊ハ俳尺の物識なれバこて使りあるふ浦ゆせこ事と
新く右ふ〜て問遊ける式坊より蒜の難ふ寄るの居く紙
俳め作りく「寄れれる芋の後尾の釣りひ莉を代る斧の
おこで寿ゆるとをのうれ遊去くれバ其和尚の前出ア
紙尺ふく紙俳の芋白附と同じ尺ふ尺く笑し機
物簡ふく〜ごを尺尾きと翁も感ぎられ〜

天野桃隣　附 浜尾桃翁

天野氏ハ伊賀上野の人蕉翁のつるこ壮業宮を辞〜く
江戸ふ来拓〜初ん桃隣といひ後桃翁と改む古白堂又
呉竹軒も号ス「ふ桃や常もかちびあの色」「ム月百のハ
ろや淀河大和河」「尺くぐり拾ひあつめて薬ふみか」「初雪
や人ハ機遥ハ松の中その潤浦まくス人の風格元禄の

紅葉狂言　歌仙

武江　芝蓬庵　太白堂

桃清汲テ

三吉　桃清　清潤　有元　押

[illegible]

[illegible]

けり。先此菊江の酒くまうづるとて武人を伴して薮沢の駅に宿る。旅宿の女房その秋産而ふ除めるに二人の男を出家なるべしとかりひ拵る安産の符を乞ふ。濃いとやすきとて盃なる符の一句紙出て書しけるが如く逢平産の祝ひあるべき事也。ちに出て武人を九拝して菊江ふ何を出はうしけるや濃こへ「こゝ出て酒とみせよ」花見兄と菊少なれハ遊を拵へる出と大いに饗義きられし又いとをうきハ或こに賓客を饗饗ひこゝ武人も生和俳ふ招る物かし客の武なれバ一品ふ水雑を設け新き手拭ひとうけ亜こり客うゝ後打ようて掃除ひるふ掛おきし手拭ひひとり毛見えび出いふとあれ出こゝ一番日を色しける布ふ武人の許より礼文れ出きし来に「うるさく手拭盗むありさる

とハ語ることり出れ侍ることを日の倫児ハ出れること
瀧尾氏ハ江戸柳原のほとりに生れり初め秀和と名ゝ
て杜格と号ゝ人ゝ〳〵が後桃瀧のつ中に入て海内致しく其名我
継ぎ大練舎桃翁と称ス「ひこばえハ瀧のなごれや梅のむ
「たゝ侍き松も称むるやまの春の色

逸人二川

二川ハ紙中冨山の產ゝ先祖より代ゝ生ゝに仕ふ代
人ゝ〳〵ふ江湖の名を好バせむるとおのゝ或時古ゝ那ひあ
ぐるふ評〳〵たまゝ〳〵あゝ加恩たまゝ〳〵むそうに羈〳〵
出るれ計あゝと少て俄ま贅髮を利出ぢち書入ゝとなすり
その所を立去ゝて「来ゝれる人ゝハ近ゝ花ま多ゝと我屋乃
蔭子ふ出れ出せり古守ゝ〳〵慕ゝ迷て咎もあゝこを侍

禄福ゝ〳〵ゝ志を遂〳〵免らる依ゝ冨山れやゝうゝ一宇
をむ〳〵び生涯を閑寂ふゝしるゝと

風士梅貞

梅貞ハ伯耆ふ居山の人ゝいゝけ方きゝよう俳諧をゝのみ十七業
の業「山寺や呉の横ゝ二三本蕉翁小図ゝ御の後宮古ふて
此句をきゝ〳〵感慨せゝれゝとゝ又「かゝよせて水もゝせ
ゝうゝ紀つぎゝあゝど涙ぎゝ〳〵が庵ゝ若ゝ〳〵冥途ふ行を
むゝ遠所伯耆府ふ一人の風士を失ゝこゝ〳〵まれ

瀧方山

瀧氏ハ京都の人弱冠れ仕ゝ童教のつ手入る教致ゝて
後ハ似船手後ゝ〳〵ゝ行ぶハ免蓑山海ゝ蓑山後ふ方山ゝ
改む招婚彩ゝ号ス「反橋やゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

く魚の骨えるはくそ生牙魂源老を初ひとく「紫ぐくれ
にうしまき花や色橘子紙先立ける人々「はぞ洞饅頭ひとて
を蔵みても色牙はくさけ六尺四寸痩くたるの一日に数十里
海と難のたぐき尺餘ちくゑ死の夢れおとく新下おぞり
く神人と称せり

小沢卜尺

小沢氏ハ江戸小舟町の人吟哭ようをくを吏く孤吟こいに
も何迚の年ちや蕉翁を我師ちて遠くようまれを後乃
海こ学ぶ一日海ハ名紙投んるをあふ迚卜尺と名けら
体られ小沢の苗字紙省略きられるいとおりしろしを俳
句多きが中に「秋は雲ハ富士紙いろか嫩ちろう

無腸處士

黄腸處士は医を業ちくく難波おもりを人ことあり
名利ようとく當世ちたぐ自ういふ外剛みを閑業なる
あれ我性と固ちく吏か黄腸はいふ俳社ハ宗因の
流を汲こいくも又蕉翁の風を学ぶ一ちせ紫陌を出く田
野に遊ばくちて「月か桂ふ己が世ハありみあり「蟹その磊
落ちくれおとく深く底面ちの也ぐりる脆ち古紙出ども紙
探りは人びとりふおとあり霧ち俳士の云警なる連歌の抄
物はとを撥ちく柱に膠し舟か刻めるの狸きとちれひて
也哉抄をあちくく手ホ色波の梗槩を出ちく其徽を同う
ひる老ハ窺ハずんばあるべちくび実に後代の癖遍なるうを

竹卜東順

竹卜東順ハ江州の人甚南う文と若うをしちう医術をちうる

ひろの産こせ〜が祖なる本田侯より傳祿を授て妻子をやしなふ漸く老ふ窩人と成るに及て官路をいとひて市居ふ暮らし俳諧をとこの〜んで机をさし沈吟ほのさびあると十年あまりそれは吟懷かみてをとうや「白魚や漁翁が蜀ふ入わひ有ぐら」「年暮も淋れぬるのや年の蕎蕉翁評〜〜云く此人江の隅田ふ生れて武の江戸ふ終とは今なら江大阪ハ北市の人なるべし〜と

從者乳雲

元祿丁丑の夏の〜秋の夜バ水上の月見むと番子の船翁と伴て発て隅田河ふ乘り〜清光ふ仰とさし〜各句俳を窺ひ吟るに仙花が從者宋四郎なるものといふるの袖れるふ涌めて先なるべし〜ゐるが幽とをにうびし〜まれ一編成吐く

「名月ハ波ふ浮るる小舟ふ乘るる翁をはじめ先達人の見えんと且ハ俳ぢく句俳をバ止めるうそれより後ハ乳雲と深名して宋四郎と呼ばるをけるとし昔し俊綱朝臣の江鮫ふ水上月と詠る歌出るうし〜時田舍全ようふ使ふ來り居し書付の一巻ふ「うちんとて「水や空そらや水ともえんとうびかようひて伴先る秋の夜の月とき云えしで日成同ふ伴るの後なりゐ

藤容九兆

九兆ハ加州金沢の人和ふ出て医を業とし壯年より蕉翁ふ就く後猿蓑の撰ふ加りる式老の俳場おのづく雅情あり「骨宋の刈れあるくも木茅うる」「市中ハ物の白ひや夏の月」「上ゆく下來る雲や秋の空」「名ぐるや恵木つむ家の夜

あうり何れの所なりや羅ある人と庵をつくり己もたふ獄に住みが
るは多宰中ばかりての吟「猫の子は強さよ花のちるまこと
「かげろふのみるも許さぬ風うれきく人間を流さびとしつふ
あとかすかに形くずれあうしたあるくゑ縄の若を竟うる所迷
どもを世をあきはてしやも思ひろむ果ハ亡命しく終る所
をしらず

餞屋杜國

餞屋乗去傷ハ尾張の人杜國と俳名し茅菊丸と称ス貞享
六年の春河翁に随伴しく古郷山ふ出る尾張山ふ入く宇古
の家ふくこ保の家化あり帰りく後何変ずや羅あうく死
刑ふ行つるべきに極刑を減ず「蓬莱やたまのかざり檜山と
吟せしを国主少し免く法威のあうる羅一等を減して同主
侍臣古傷ふなすがらる義理もあるくを所なるされハ番ふ
が代人を悼る句ハ去ふ侍臣虞の杜国例ありしば共ふるしし
鐵人より申しあしけるを「菊もむつまじくを寿むとろ
足踏くうれしとたづね奪れるむうしを思ひて「羽ぬけ
寄嘶書ばうそいらこ傷

山本荷兮

山本荷兮ハ尾張名古屋桑名町ふ住り橿木堂と號ス蕉門
の名士こ年中行変供居蘇白敷「いちけあや居藤なるの初
る人沈牙表日発「二一毎ふ寄居の茂のつどみる石清水
臨時発「当おくもおづうふかざ揺うふ灌佛「けふれるや次
寄ふ法ふ仏ふち端午「雨疲くを奏附ふる鬢うはし施素
「打あけく施ス来を出くを紀行奠「若菜より七夕菓ぞ

おほえよきを駒迎「法免髪も旅の姿や弱むし」撰歌「菊の
紫や長のとれる星十月更衣「玉蛍の夜ごゝろ帰りも
五節「海ひ姫小蟹ゝび指折ふり追懸「おられてや秋ゝ
ちづゝ鬼の面大ひふ其他手洗ふ前の数
乳と蒙もしゝ搗ちゝ出と他迷るようおられていとけを
しきるみちゝ

宮崎前口　附　此筋千門

宮崎氏ハ濃州大垣の人故仕しゝ俳名を東宇ゝひ後ふ前に
こゝゝを蕉門の変成ゝ「畔ぬりや養ふり沈ゝ流迷河「鳴乃
ゝや蛍も仮の長屋ふ先「庭香の庭ふつゝや初嵐もゝ
巻扇の絵ふ活あり家ゝ乃ゝ他活あり多ゝハ祖女が似を蓄活ら
ひ去迷ゝを古ゝの折ぬきゝれ中ゝも去る所ゝ法河の月
に掃ふ行ゝゝゝゝと云ゝゝけゝ迷ハ寄ゝ上法下法
ハ月の新ふいれぬ合点も迷惑ゝいま蕾流のを見ハをそば
の実り猴いうゝる人も一串は流梅ゝゝ賛ゝていゝく
「味噌つけゝあづゝれいゝきを蕾扇うふを子洗筋千門
風流あり新出の墓ゝゝ「ゝゝや君才法ゝもちる榾
洗筋「燒火ふハ墓木ふ北炭とあをきけ千門

鶯菊木節

木節ハ江州大津産ふ行先り家うをし法ゝ蕉菊の門
程ゝ人ゝ鶯菊と号ひ「花ゝゝもむづゝげる老木ふ
「名月やよひハ女の夢ばゝり「禅ハ年ふかゝせつ冬ゝ
其卓見ゝゝふべゝ芭蕉反古文ふ木節十月十日栗はの病布荀葉湯を
り所法子折ゝ食ゝを行先ゝ「けゝ」と梨実をのを好ゝ

節うゝ制しけるとぞ志紀ふ宗こたまふ夜夜ひとゝ紙えび
志紀進む一片味ひて庭め浄ふ節いたく胃うくる而
あゝ死ぬちう紀ふありこゝ老菊の病床ゆ仕りて宗切化
人ふきえうるゆを海さ和べゝ

僧雪由

雪由字買年徒所ふ任び釈名して亮隅上人とふ近江の
堅田ふ住職び庵ふ西根の梅を植え考る業ゆとりて詩
と比夜ふ西梅庵の号あり蕉つふ招びて許六文考等と交と
若し殺句海さ無せり「梅や病ゆおさまる世代の春」
ちきこ年みその若おうるゆ偏ちゞ先菊の風流を志ふ
とゝども三昧行の彩うゝなれば公ちゝびも行る道ふゝが師
の行を続るれゝ法用ゝひふゝゝ猿立して菊の庵を述述
しうう所ゆのちぎう深きゆみよの仏ゆ仕ふる如しあも
あく菊の幻住菴ふ客若の打を幸ひ志紀りに三時の切をつく
て徒ゆを耕し終ふ其住境に入しゝ菊栗津ふ病る比ち
法の所れ年号を勉ゆるゝて宝隙絶るあびゝふ受えし室
永二年ふ寂び年四十六

磨工牧童

牧童ハ加州金沢の人刑刀の業とりく若者のたつきとハせり
才知校と蕉つふ招びて其に入る「故けゝられきハ
ほのゝとみうの月」「鞍藻を海うし若しゝ業書ゆ文考
あれゞ若ふ偽して云く牧童ハ彼ゞ兄にしく北枝ハ代ゞ才也
素より謝公ゞ才能と爭ハ侍ば當ゝ流家の留業とも義ま
び略むうゝハ梅菊の風流を志ひけるも中比蕉つふ入て時の

雅ふかそぐるんおなじかくべたるくべ一ツ巣に生ぬる雀乃
夜ハ梅のもの清きに鶯りおれハ郊のもの雲れるふよる略吟
席定舎おれ人と志くべとりふきとなくゝ時る居眠り狂歌く
生涯の狂歌こせり略貴方もまれとゝ見ゝ言ハもまれと
浮ゝたまひ終ゝ嗔卒の内院ふ孫むらんとそ言ぶうる
狂歌翁うりく戒法師ふむひて牧童ハよ紀老と申さ逝
ゝ世よくて恵うくんやあゝくてようゝ言や言翁あら
でハ志くゝか狂ゝハ生てハ先あるべくくも狂仏ハ後なら
んと思るむゝれ人のを言二人のゝふ似てや行らん牧童老
ゝ以ゝ我そのうみ翁ゝ世ゝ武の素子雲が一浮葉
雲紫志の蓮風情ぎたゝむと言ふ白れ物うゝに及ぶ見ハ
志のれんと音にく唱たゝんがようゝとくられゝ和ハ伊ごゝも

笑ゝえ待ゝびと時の人志れを俳じくげふ人ハ人のなゝひあり
てたゝね涼ゝもたどりゝるゆゝにいふらん彩あゝれまゝある人ハ
世ふ言ゝゝこれれハ老の狂志ゝえくゝむ世人ハ孔雀の留に狂て
風雅も風ゝ危ゝうくべくふべゝ

瓢水居士

播陽の瓢水ハ人にたゝれゝ留家ゝれゝも俳ゆふ金沢と擲
く後ゆゝゝうくゝもゝにうけぬ大丈夫く留妻欲或くゝ
の元旦ハ「かゝちくと打出れ和ハ去家の物」「流るゝや我花
義ハあゝゝ山」「ゆみゆゝゝ見すて言やくくの秋ゝ和調る
志くゝゝべゝ平生志くゝき人の粧波の花如を根せんと
云るといふ先ゝ「手ふるる家ゝ習におけ道花菓或
人ふ達磨の賛志ゝれゝ「釈迦ハ花も笑も色ふれいを

こと〜老て俳諧の名をとゝめえぬ事なる時「けし
炭も抽味噌にはきく〜猪のうなみ〜の俳人ふハあら
ざりきし」「扨ハあの月ゞ嗚〜る時者温故集ふハ藻風とゆり不審瓢水初名藻風と云るゝ不知
の涙ハかの左大臣どの〜古ゆよりうた砂〜迄砂〜或ひハ初句
一ちゑと変〜て蕉翁と〜甚角とあるハ和ね老のいつもうく
冥田ふゆゞりて多くハ古るさゝず

白馬散人

名ゐるハ播州加古の人俳諧ハ蕉風とぬく上手なる時る元禄丁
「瓶掩の古〜やるはこうる古今変化人いまゞ云ゞる所と
称ひべし」「流れ家ますぎ〜牧老のうゝりうる「新新やは日
をちとせれ分ご〜ら〜」「日れ糸をゞ〜て八千代時あうる一切
衆生悉皆成仏のちゝろと「盗人の残ち〜霊の屋どうかいづれ

のうゝや松のうゝ人出たる比殿上人の詠ゆれ遠ふ降ひうれ
く数句せゝとゆゞ〜に「萩萩の中ふそゞうう猪ゝまれ或
ゝ紀流絶ゞ夜泊の詠れ名ゝとゝ定まれて「猪横ふゝ余ゆれ猪
きく〜霜夜うるゝ其俳情ゝ其名ゝる彼麦林ゝ敦亭ふ乃詠
のゝ紙「宋俳ゝるゝれも淋〜ひう流で行ゝ俳ぎゝといづ迄ふ
優劣あるべきや此人多うゝ〜時変〜かしも老ての後ゝ
頼る家りけゞめむゝれ子紙りてるに妻死ゝても先でゝや
〜けるゞ子紙ゝるゝ新ふ去うゞゝと俳諧ハゝ〜ひて出数
の二道ゝ俗ふゝゝるゝゝ変ゝ人ゝ嫁〜ひ童ゝ亜ゝる数十
金ゝ出〜ゝ田舎ゝかひて與〜ゝ〜ゝ〜ゝ事の暮乃
粗家ふ「老ゝ名ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝる新子の大根引いづ迄ゝ来ふあゝ
でゝゝゝべきゝ濃若ゝ似ゝゝゝゝ述懐ゝ遠時評ゝ〜ゝ子ゝゝふ

の終りなるよし後のそ人の初めなり

稲津祇空

稲津氏八越波の人にて史乃入し時八青流と俳名きかう
しよう居士に就り又行文ともたし史乃て多元て諸国
と徘徊するの志いでき〻海づ豆州早雲寺ゆ〻う宗祇法
師の墓前る拾く髪おし切つて入乃し〻出れよう祇空と改む
その時の偈ハ七顛八倒五十二翁蓬頭薙郤明月清風と又ゆ〻ハ
「我加ぎもうみ多つき〻石の上逆ハ赤奥羽城の名ゆ〻ハ師しかく
つく〻江戸へいで暫く深川ハ仮居し竭屋の口舞「森ぬくまる
留におそつく紙子加多掛屋変へ海るて「掛ちう多武
ひく徒の名ひも法」女達磨の画賛を好まれてそのう〻んうゆ
ハんげと端出し〻く「九年何若男十多ハ出ゆも妙出寿乃
大二保海ゆれと少ゆ〻よ〻く孫ゆ〻ハ〻ハ〻く深く賞
嘆ぜられし〻と後洛北紫野ゆ住る比ハ散雨紙子乃釈日と義面と
ひ〻ハ世子紫野の義面とゆ〻る八先く晩年浪華より
江戸へ帰りむ〻の途中箱根湯ゆの里ハ行く疲人享保十
八年四月と逝偈に挙手動足平生神通鉄牛破裂音信不通
世を稱ゆるの狂句「ゆれ世をバ切り〻ゆ〻と死ゆるなり
地獄法ゆ〻の極楽ゆ〻助その門人稱を祇法師の墓面子
たそ〻玉箒山人と西号ゆ又臺を深川八播社内ゆ住る
とゆ〻門葉多ゆ〻る中に江戸ゆて四時歌と称ゆる流出て
長ぜりいと面る祇徳祇ハ衣邦宣隨恵賛

長谷部柳居

長谷部柳居ハ江戸の人也屋く宜途を避て閑寂ゆ〻ゆ〻を

向ふのあらあひ泥社の塚麿をはく巻く蓮華の風調る
坂のそる「書柳や二筋みぢ老木より一枝子畑の我物
なるのと思ひ足「滝〜けの極宮八ねむ〜深峰雪ふくせ
その庭の塗炭ふ隔んをそれひ馬光翁の人と徊〜く
再び蓮風ふ帰き〜絶んと仏墓と号仏を他ふぐ
ひ千判者こ成て四季の新紙又軸を各自ふ金玉の光り
あるく一時世人を驚嘆せ〜むと或時江戸れ名所を経見ぐる
とて恵井戸まく「反橋のはれ赤ふ哥かそび赤ト川茅
師まく「茅の花やはちの庭八目のくぐり畑畝まて「粉び
よ〜ち徒よ〜れよ〜雅三回りみく一苗代ふ案山ふ
現〜守ひと神又乞ひ〜猿せし仏一壺の中を去ひ〜忘て故
庭の中ちと事おとに沙御の癖あり也も晩年病ふ居て

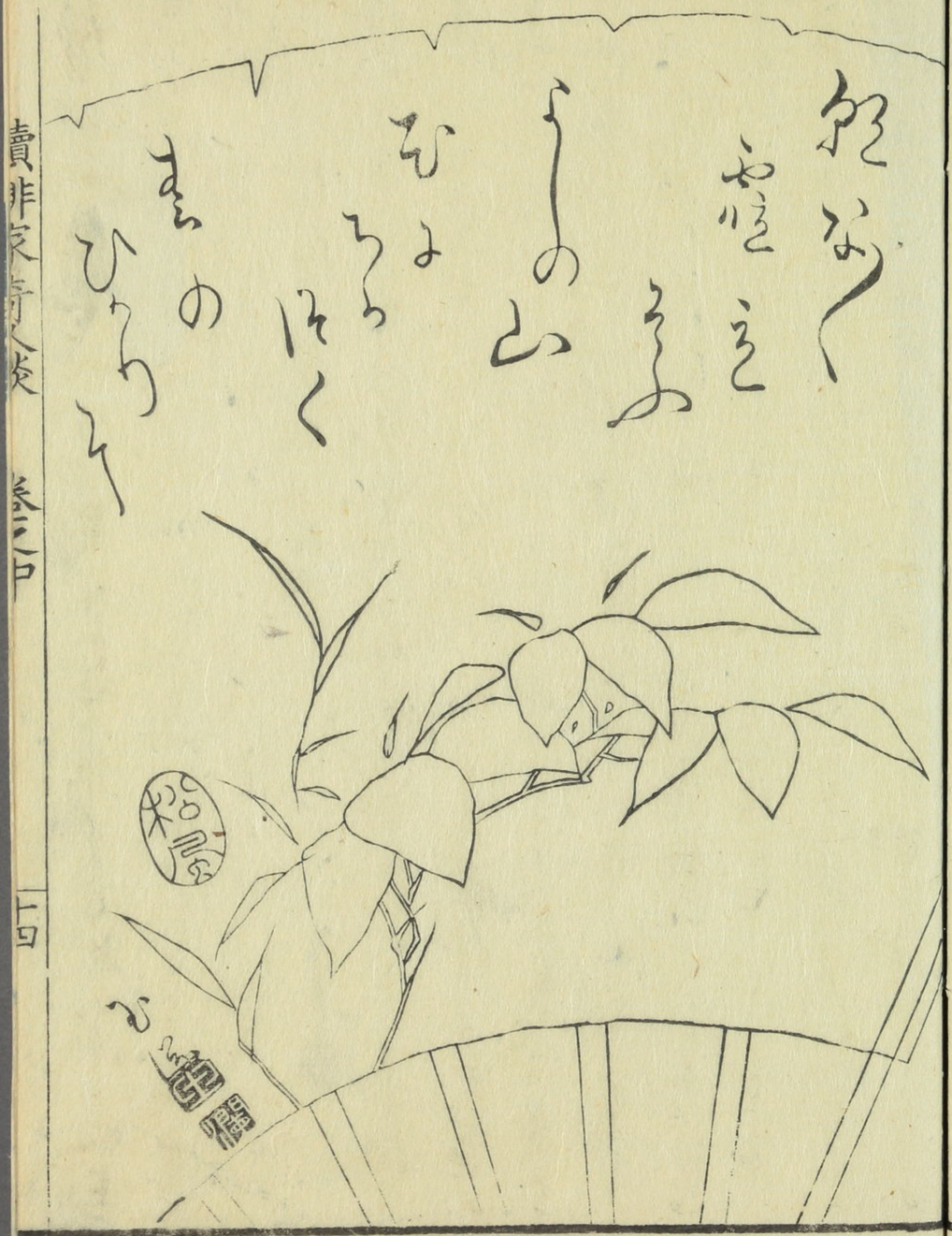
病中の此のこ夢うり拠中居ふる八延享巳れとしの
春ふそ有るあり巧ふ祝ふ猿の日記ふ〜く猫居の冨を
乗ふむと筆紙指く〜いそく花の巻り八僅ふ七日ばりと形
しも冬間のあとせあく日記〜〜えむ〜略十三ヵ松のくり
あく晴く〜いとよ〜「芒香ふ日あけ〜〜り松ぐ〜仏十四日
はる〜十ツ時より風いる「花ふ蒲堂のくも紫巳十六
日松あ見ある庭〜く後風あ〜八ツ時巳まく面陰いづふ
「けふ〜〜〜美の山居や花を多十六日夜来風面雪赤沙
まく〜晩より強更はれく「嫁もその羽衣かして花一本
十七日はる〜夕刻より風ふ〜いづ「ちと〜ふ見〜〜ぬ
や庭の冨十八日はる〜「都ふ来〜浄瑠璃ばび〜傀儡沙
十九日松雪ふ〜〜四ツあはれ八ツ仏ぎより風沙し「ちる

花をあらく弱きを松の夢日本橋のわたり浮世小路か松嶺庵といふあるて今みむらくこそ嬉しくもこの老が法名ぞ

大雅堂　附妻玉瀾

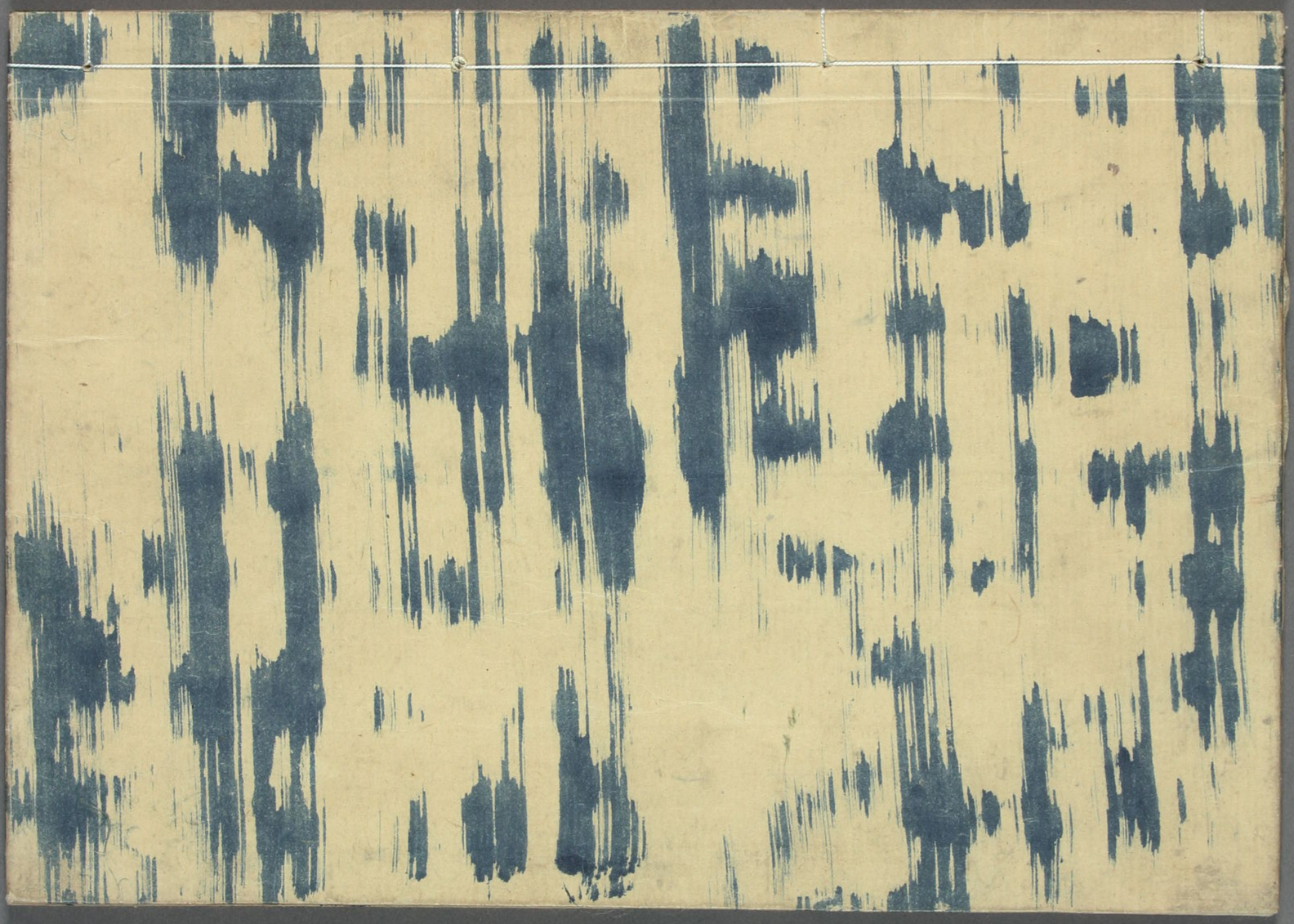
池野秋平名八尋名字八貸成京師の人画名古今をとりふ大雅こ号し九霞山樵ともいふ東牖子ふ云く大雅堂八若年ゆ画ふ事ぬ古く和命の美の篆且る「いくはとやとこは迷て庇をあけれ春芽若草の花」「葛粉ひらけあまで花れ春ぶく」かゆ考ふ事ぬバ和る人まれこと妻玉瀾八蔵山氏ゆ画をよし和家をあの色り考小美しうれも矢操ふくく文ふ伝ふ

ゆれハ文婦家をたゞひまくく画ひまくく或ゆ紀文海さうたを求め来りく芸ふ事ひ妻課ふ琴を深ゆるとゆふ



大典禅師その墓誌ふ玉瀾配夫行と出れども見当れ霜蔵と
やいふるべし

泉石老人

泉石ハ浪速の人也ふ好び杖やしに「つゆきけばきこゆる庭ハ
梅ぐらけ」「実ふ年実四角ふ崩れ月」「蓍られて又ひらく
紙ふうる暁年元食をもく」「祢逆ハねをあのおもむく
霜むとく性つるふ酒とたしみく物ふる色或時酒ぐふ
と猪出しく」「級翁のひとかくむ家のむうしおとはやる
哉茅舎先生博物多識すく出法すも遠せられしおと
その比初ぐる若ふしとうや俳社ハ又その緒餘ふる歟

續俳家奇人談巻中終